
雪夜

SUPY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪夜

【著者名】

SUPY

【Zコード】

N9276C

【あらすじ】

一人の探偵がぶらりと寄った山奥の旅館。朝起きると男が一人死んでいると云う

弱つたなあとふかりと煙を吐いた。昇る煙を田で追いかけてもうひとつ弱つたなあと頭を搔いた。最近風呂で頭を洗うのをさぼつたせいか少々ふけが飛んでこれにも多いに弱つた。

そうしてまわりでは大の大人が雁首を並べておれが喋り出すのを今か今かと待つている。そんなに沢山の田舎で見られる事には慣れて居ないものだから尻の下が痒くなつた

向かいに座つているじいさんはこつくりこつくり船を漕いでいて、人の気も知らずに呑氣なものだ。こんな田舎に来るんじゃなかつたと大変後悔した。

それでいて動くに動けず喋るに喋れぬ。全く似て弱つた。

おれは学問は嫌いだつたから学はない。学は無いが、こじんまりとした探偵事務所を持つている。大して繁盛しているわけでもなかつたがどうにかして食つていける分は稼いでいた。それでも盆正月は実家に帰らずに働いていたら、大家がやつて来て、田舎に少し骨休めにでも行つたらどうかと勧めてきた。静かで温泉のある良い旅館を知つているからあははと云つて、おれはその旅館というのは何処ら辺にあるかと聞いたら全くの雪国だつた。

おれは雪が大嫌いだ。冷たくつてなんにも楽しいこともないし、何より不便だ。そう云つておれは最初断つたが、大家曰く温泉に浸かれば雪もそう悪いものではないからのんびりしてくるといふと云う。働き詰めだつたからたまにはそんなのもよからうとさつそく昨日やつて來た。

電車に揺られて着いてみるとやつぱり雪国だ。あちこちが真つ白でなにも面白くない。宿の者が迎えに来ていたから迷わず旅館に向かつた。こんな田舎では他に見るところもなかろう。

旅館は古くつてなかなか趣があるが、とんだ山奥だ。猿が温泉に

浸かりに来ると聞いたがもつともだと思つた。ここまで秘境だと猪や狸が手拭を頭に乗せて湯に浸かっていても驚かぬであろう。おれは真つ直ぐに温泉に入つてそれから酒を飲んでじろんと布団に横になつて寝た。猿はいなかつた。

湯に浸かれば雪も良い物だと大家は云つていたがそう良い物でもなかつた。肩まで浸かり温まつたと思って立ち上がる。すると雪が肌にひつついて途端に寒くなる。だからまだぶんと湯に潜る。ずっとそうしていたから頭がくらくらした。

目が覚めるとばたばたと五月蠅いからなんだろうと思つて朝飯を持つてきた仲居を掴まえたら、脱衣所で男が殺されていたそうだ。おれが警察は来たのかと聞いたら雪がひどくてまだ来れそうも無いと云つた。悪いのは全部雪なんだろうが、こんな警察も動けぬ程の雪の降る地域の山奥に旅館を建てれば何かと不便なことは少しさは予想できそうなものだ。もし次に建てるときは駅の隣りに建てるがよからうと云つてやつた。つてやつた。仲居は町中では風情がないと云つて何処かへ行つてしまつた。朝飯は精進料理かと見紛う程に不味いから少し食つて後は残した。

朝飯を下げに來た仲居から警察が來るまでみんなで大広間に集まつた方がよからうと云つことで客も仲居も全部広間に集まつてはいるから、お客さんも着て下さいましと云われた。そうして朝飯がやらと残つてゐるものだから、お口に含いませんかと聞いてきた。おれは何も云わなかつた。

煙草をふかふかしてから広間に向かつた。

広間には十七八人程がいておれは隅の椅子にどしんと腰掛けた。女将がおれに近付いて今回はご迷惑を御かけしまして云々と云うからおれは何かまわん、とんだ災難だなど答えた。

ついでいつもの癖で名刺を出してしまつた。今思えば何でわざわざ名刺等持つて來たのだろうかと甚だ後悔した。女将は細い指で名刺を受け取ると額面を見て、まあと声をあげた。こんな田舎では探偵業も珍しいのだろうと少し商売つ氣が出て、何かありましたらどう

ぞ御声をかけなすつて下さいと云つておいた。そうしておれは隅で
ぶかぶかしていたが女将はおれの名刺を仲居達に見せびらかして
いた。

おれは今まで探偵なんていうものは当人が知られたくないも
のをわざわざ掘り当てる、こそこしたようなものだと思っていた。
実際におれがやつてきたのも浮氣調査や素行調査のような他人の秘
密を暴くのが主で、堂々と世に顔向ができるような事ではないと思
つていい。

他人の尻の穴に毛が何本生えていようがおれはとんと気にならない
が、他人の尻の毛の具合を知らねば済まぬ物好きもいる。そういう
輩を相手にしていたから、あいつの尻には毛がいく程かと聞かれれば
おれは調べた。ところが今では探偵というものはなかなか勝手が
変わってきたようだ。

女将はおれを呼ぶと真ん中にでんと構えたテーブルの上座に座ら
せてこんな事を言い出した。

「先生、私推理物の小説はよく読むんですけど探偵つて云うのは
こんな時犯人を突き当てるのが仕事なんでございましょう」

女将はおれに犯人を捕まえてくれと、そういうのだ。そんなものは本の中か漫画の話であろう。そんなものと一緒にされては全く迷惑被る話だ。しかしここにいる者は全員田舎者なのか全く要領を得ない。是非先生先生と云つて手を合わせている。おれは医者でもなければ教師でもない。先生なんてまっぴらごめんだ。まるで醉狂の極みだが、本人達はまことにもつて本気なものだから弱つてしまつた。

そもそも昨日男を殴つたのはこのおれなのだ。おれは酒には強い
方だが、昨日は風呂に長く入り過ぎたからか早い時間から良い心持
ちになつた。そうして千鳥足で一升瓶を抱えたままふらふらと温泉
に行つてみた。猿がいれば一緒に酒を飲もうと思ったのだ。脱衣
所には一人の男が服を脱いでいる所であった。おれはどういうわけ
か一升瓶で男を後ろから殴つた。何故殴つたかと聞かれてもさつぱ

りわからぬが、確かに殴った。男はどうさりと倒れたのでおれは部屋に戻つてそのまま寝た。

そんなわけだからおれは犯人を知つてゐる。知つてはいるが云うわけにはいかぬ。まわりでは先生先生と囃立てる。

おれは全く弱つたなと思いながらふかふかと天井を眺めている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9276c/>

雪夜

2010年10月17日13時40分発行